

# Event Schedule

4 April	4月2日(月)~7日(土)	開講式・新入生ガイダンス[教]
	4月4日(水)~7日(土)	学生定期健康診断(2号館)[学] ※4月5日(木)は新入生のみ(学年・学科・性別等によって日程が異なります。)
	4月5日(木)	サークル新入部員募集(本館)・新入生歓迎会(本館)[学]
	4月8日(日)	入学式(日本武道館)[学]
	4月9日(月)	平成24年度授業開始[教]
	4月9日(月)~23日(月)	履修登録期間[教]
	4月10日(火)~20日(金)	各学生研究室説明会[工]
	4月11日(水)~25日(水)	課外講座個別説明会(行政書士、宅地建物取引主任者、簿記、 ファイナンシャル・プランニング技能士、公務員、秘書技能検定)[工]
	4月12日(木)	Westlaw(オンライン・データベース)利用講習会[図]
	4月13日(金)	JURIS・GRUR plus(オンライン・データベース)利用講習会[図]
	4月16日(月)~20日(金)	図書館オリエンテーション[図]
	4月26日(木)	D1-Law.com(オンライン・データベース)利用講習会[図]
	4月上旬	日本学生支援機構奨学金予約採用候補者「進学届」提出期限(4月初回振込希望者)[学](予定)
	4月中旬	日本学生支援機構奨学金 新規募集説明会[学](予定)
4月下旬	日本学生支援機構奨学金 新規申請者 書類提出期限[学]	
5 May	5月17日(木)	第1回総合就職ガイダンス[就]
	5月21日(月)~22日(火)	履修登録中止期間[教]
	5月24日(木)	インターンシップガイダンス[就] 就職マナーガイダンス[就]
6 June	6月4日(月)	課外講座説明会(SPI2対策講座6月コース)[工]
	6月16日(土)	第1回 Saturday College(体験授業)[入]
	6月上旬	健康診断結果の配布開始(保健室)[学]
7 July	7月15日(日)	オープンキャンパス(夏)[入]
	7月28日(土)	前学期授業終了[教] 第2回 Saturday College(体験授業)[入]
	7月30日(月)~31日(火)	補講期間[教]
8 August	8月1日(水)~7日(火)	前学期末試験/平成23年度再試験[教]
	8月8日(水)	夏季休業開始[教]
	8月30日(木)~9月12日(水)	夏期集中講義期間(土・日を除く)[教]
9 September	9月12日(水)	夏季休業終了[教]
	9月29日(土)	第3回 Saturday College(体験授業)[入]

各項目についての不明点等は、各担当部署にお問い合わせください。また、略字は次の通り。  
 [教]教務課 [入]入学センター [学]学生課 [図]図書館事務課 [工]エクステンションセンター [就]就職指導課  
 ※日時や詳細が決まり次第、掲示板およびホームページにてお知らせします。

# 日本大学法学部 Journal Vol.6



[www.law.nihon-u.ac.jp/](http://www.law.nihon-u.ac.jp/) 詳細情報は、随時掲示板およびホームページを見て確認してください。

日本大学法学部 Journal Vol.6 2012年4月1日発行 日本大学法学部広報 通巻114号 発行:日本大学法学部企画・広報委員会

# あなたはなぜ学ぶのか？

新入生にとっても在學生にとっても、学びについての気持ちを新たに作る季節。高校との学びの違いに戸惑う人もいるでしょう。大学の教員を高校の先生に比べて「冷たい」と感じる人もいないのでしょうか。大学の学びとはなんだろう？ 学問の楽しさ・面白さって？ 今号は教職員が、一人の学ぶ人間として語ります。

## 教職員からのVoice & Opinion

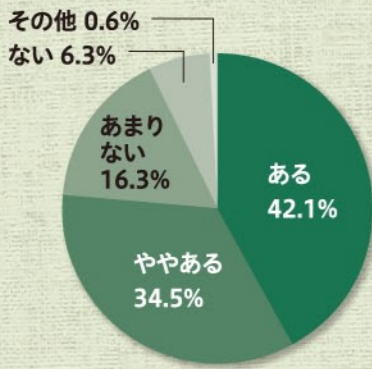
前号「Journal Vol.5」で実施した「あなたはなぜ働くのか」のなかで、教職員にとっては気になる回答がありました。日々の講義のなかで「この勉強が果たして将来の仕事に結びつくのか」と思っている(思うことがある)人が76.6%にもものぼっているのです。それに対して教職員からはこんな声が集まりました。

**A1** その学びは果たして役に立つのか？ (アンケートQ10についての自由意見)

**A2** あなたはなぜ、学ぶ(学び続ける)のですか？

Journal Vol.5 在学生アンケートより

Q10. 「この勉強が果たして将来の仕事に結びつくのか」と思うことはありますか？



Pick Up!

### こんな自由意見

「ある」「ややある」ひと

- 文系なのに数ⅡBとか
- 良い成績を残せば、「勉強ができる」証明にはなる
- 語学以外は役に立たない

※「Journal Vol.5」は、日本大学法学部ホームページの広報・刊行物からもダウンロードできます。

「あまりない」「ない」ひと

- 無駄な勉強など一つもない
- 勉強そのものを楽しんでいるから
- 見識、教養のためだから

**A1** 大学での勉強が将来の仕事に結びつくのか否かという短絡的な二分法で捉えるのは、あまりに浅はかな思考回路だと思う。学問をいかに将来に結びつけることができるかを考え、何とかして結びつけようと試行錯誤を続けることが必要であり、思考の蓄積や経験の蓄積から何を学ぶかが将来的に問われると思う。

**A2** 一人の政治学者として、一人の大学人として、一人の人間として、良き市民になるため。

政治経済学科

**A1** この結果は当然だと思う。学びが学ぶ主体にどんな効果をもたらすのか、時を経なければ分からないから。真の学びは漢方薬に似て、即効性はなくじわじわと効いてくるもの。人生同様、それは一種の賭け、自己投機である。だから、自分を信じ、そこに身を投じれば、新たな自分に出逢える(かも知れない)。

**A2** かけがえのない喜びと希望が得られるから。アリストテレスによれば、どんな能力の行使もそれ自体愉快なのだが、学ぶこと(認知能力の行使)は、人間にとって最高の楽しみである。さらに学びは、新たな世界が拓ける未来(の自分)への期待を伴い、ゆえに希望とつながっている。たぶん何歳になっても。

外国語科目

**A1** 自分の生活を豊かにするものが学びです。学びを実利の面からのみ考えないで欲しい。

**A2** 面白く、楽しいからです。自分の知らなかったことが、分かるようになることは快感です。

公共政策学科



**A1** 役に立つかどうかを考えて勉強に取り組むなんてナンセンス！ 何でも興味をもち、新たに学んだ知識と自分がすでに理解している事柄をリンクさせ、違った角度から説明することにチャレンジしてみよう！ 全てがつながっていくことがわかる！ 学んだことを役立てる考え方を身につけよう！ 一生の宝になる！

**A2** 学んで知る。それにより色々な人と出会って話をするとき共通の話題を持つ可能性が増える。その結果、友達が増える。学ぶことは相手を理解することにつながり、お互いをリスペクトする人間関係を築く。みんながハッピーになれる！

経営法学科



**A1** 役に立たない学問はないと思います。興味の「ある」「ない」に関係なく、いろんな分野の学問を在学中に学んで欲しいです。興味が無いと思っても、何か一つでもその分野から吸収できればそれで十分だと思います。そして幅広く知識を身につけて、この職業に就きたいと思える職業を見つけて欲しいです。

庶務課

**A1** 大学で学ぶことが社会で実際に役に立つという判断基準は、教員と学生とのあいだでかなりの隔りがあるだろう。たとえば、食べ物によって健康な身体をつくることと、トマトがダイエットに効く、コラーゲンをとれば肌にハリがでるといったことは全く別話なのである。

**A2** 学ぶということ、知りたい欲求を満たす手段ととらえるならば、誰もが生きている限り学び続けるはずである。知りたいことや興味がもてるのがどれだけあるのかによって、学ぶ対象や範囲は広がっていくであろうし、それは尽きることがないと思う。

法律学科

**A1** 簿記や宅建、さらに難易度の高い国家試験をクリアしても、それは単なる通過点にしか過ぎない。専門職としての適性を評価されて職を得ることや、その後の実務ではもっと高い壁が必ずある。

社会では問題を発見して多様な選択肢の中から最適な意思決定を行う能力が要求されているが、それには大学で科学的な視点(社会科学なら間主観的な視点)を身につけ、実践しうる力を養うしかないと思う。

**A2** 21世紀はあらゆる分野で問題が百出し、急速なパラダイム変換の兆しがある。フレッシュな感性を持つ学生諸君にはそれを感じることができるだろうか？

多くの時間を費やして得た成果がすぐに過去のモノとなる。だからこそ仕事も趣味も生涯にわたって「次のステージ」を模索することが必要で、またそれに熱中することがとても楽しい。

公共政策学科

**A1** 学生時代に学ばなくてはならない。何事も前向きに取り組まなければ、次のステージも見えない。勉強し、失敗し、成功するパターンを学生時代に築いた人間は強い。

**A2** 目標に最短距離で近づくものだから。

庶務課

**A1** 「学びと仕事」について、一度真剣に考えてみて、学ぶ楽しさを発見してもらいたい。現在学生で十分な時間があるので、遊ぶ時間も重要ですが、勉強の時間もしっかり確保して、真剣に取り組んだ勉強を、のちの仕事につなげていって欲しい。

**A2** 充実した人生を送るためにも、常に学び、そして何かを社会に貢献できれば幸いと考える。

教務課

**A1** 勉強と仕事の関係について、「仕事」と「就職」は違いますし、「結びつく」についても、実利的に「役立つ」ことを一概に指しているわけではないと思います。そもそも、私たちの社会生活にとって「仕事」は、ほんの一部を占めるにすぎないのです。大学での勉強(学問)は、仕事も含めた広範な社会生活と呼応して成立しています。

**A2** 問いの立て方は、「学び続ける」というのではなく、「問い続ける」ということではないでしょうか。「学ぶ」というのは、「問い」に対する方法論の問題です。

新聞学科

**A1** 教員が学生のニーズに対応していないのかと感じる。一方で学生のニーズが近視眼的なかもしれないと危惧する。時が経つと古びるかもしれない知識だけでなく、時代を超えて古びることがない思考方法も学生に伝えていくはずだから。

**A2** 自分と世界を認識し、自分と世界との調和的な関係を確立するため。

外国語科目



# 尽きることなき「学び」への探究心

大学の先生って、実は教えるだけが仕事ではありません。それぞれの専門分野の世界で、より深く、そして人生をかけて学び続ける人でもあるのです。学びの扉は、どうやら自動ドアではなく、かといって無理矢理こじ開けるものでもない!?



音楽のライブも講義もギャラリーが多ければ多いほど燃えるという池田教授。「マンモス授業大好きです。声が大きいのでマイクも要らないくらい(笑)。板書はほとんどしないが、事前に教材を完璧に用意する。

## 憲法学 池田実 教授

恩師に「就職ありませんよ!」と言われながら猛然と勉強し、憲法学者の道へ。



早稲田大学政治経済学部 小林昭三ゼミナールの同期生と。最後列の中央が池田教授。



早稲田祭でベースを弾く。コンテストに出て「ベスト・ベーシスト賞」をもらったことも。

### この学問と出会いトビラを開いたストーリー

私が学生時代を過ごしたのは1980年代初頭ですが、その頃は大学受験の段階で将来のビジョンが固まっている学生はほとんどいなかった。私もそうでした。何しろ音楽が好きだったので、心おきなく音楽をやるために大学生になろうと、それだけでした。政治経済学部の政治学科に入学しましたが、学ぶうちに政治学そのものよりも、政治のルールの本質である憲法に興味をもつようになりました。

ゼミの担当教授、つまり私の恩師は、当時まだ数少なかった「改憲派」の憲法学者でした。周りからは変わった集団と見られていたようですが、ゼミは非常に面白かった。議論に一切タブーはなく、先生と学生が丁々発止でやり合う。私はすっかり恩師の憲法学のとりこになってしまい、大学院へ進学したいと恩師に打ち明けると、開口一番「就職ありませんよ!」と。それでも何しろ猛烈に勉強したくなっていたのです。遅いですがね(笑)

憲法学に本格的に取り組み始めたのは、大学院に進学してからです。図書館の院生閲覧室の主のようになって、朝から晩まで勉強。学生同士で盛んに勉強会もやりました。修士論文を書き上げ、博士後期課程の試験に受かった時点で、時間はかかるかもしれないけれど、絶対に大学の先生になろうと心に決めました。25、26歳でやっとな、ですね。

### 「二十歳の頃」のわたし

音楽三昧でした。自分の大学だけでなく、他の大学のサークルにも顔をだして、まったく悔いが残らないくらいやり切りました。今も音楽は続けていますが、仕事からみではない仲間がいることは、学生時代に好きなことをやった恩恵のかなと思います。

もうひとつ、人との出会いということ言えば、やはり恩師の小林先生のご指導は得難いものでした。特に大学院での論文指導はたいへん厳しくも親身なものだった。論文をもっていくと、その場で2時間、3時間かけて直してください。真っ赤に朱の入った論文を、落ち込んで帰るわけですが、それを学び直して書き直すと、次には赤がだいぶ減り、繰り返すうちにいつの間にか修士論文ができていくんです。これには「しびれた」(笑)。大学の先生の教え方というのは小中高の先生と違うな。私もいま学生に対して同じことをやっています。

### この学問と社会とのつながり

法の親玉が憲法ですから、私たちが日々直面する問題はほとんどが憲法につながっています。ただ、そのつながりは間接的で見えにくいものが多い。実際、実生活にはほとんど役に立ちません。しかし、本当の意味で危機に瀕した時には、憲法は自分を守る強力な武器になります。法律をつくる国会議員にしても、裁判でさまざまな主張をする弁護士

にしても、法律を解釈・適用する裁判官にしても、最後のよりどころは憲法です。

### 「学問」することの楽しさ、面白さ

タデ食う虫も好きずき、と言いますが、学問で身を立っている人は例外なく、「好きでやっている」のではないのでしょうか。苦勞して書き上げた論文や著書が書店に並び、全国の図書館に收藏されて多くの人の目にふれるのは、学問研究の醍醐味です。真理の探究に終わりはありませんから、常に学生時代のような地道な「お勉強」が必要ですが、やがてそれが実を結ぶことを直感していれば、50歳を過ぎてもお勉強はまったく苦になりません。

大学4年間は、奇跡のように贅沢な期間です。挫折や回り道を悔やむのではなく、その経験を楽しむ気持ちをもち続けることができれば、いつの間にか学問が職業になっていたりするでしょう。

#### ◎ この学問の魅力

なんだかんだで最後は憲法だったりする

#### ◎ こんな性格が向いている!

● 無理屈をこねるのが楽しくてしょうがない人

#### ◎ 実は、実生活でどう役立つ

私はこれでメシを食べています(笑)

いけだ・みのる / 1961年生まれ。早稲田大学政治経済学部政治学科卒業。早稲田大学大学院において修士課程修了、博士後期課程単位取得退学。山梨大学講師・助教授、日本大学法学部助教授・准教授を経て、2008年4月より現職。

### この学問と出会いトビラを開いたストーリー

最初から民法が面白いと思っていたわけではありません。当時は我妻 栄先生の「民法講義」が読まれていたのですが、それがいまひとつ私にはわからない。わからないけれども「民法を制するものは司法試験を制する」なんて言われていて、民法ができないとマズいだろうと(笑)。わからないから、これはひとつ民法をやってみようかと、そんな軽い気持ちでゼミに入りました。

ところが、学び始めてみると、独仏の民法をベースにつくられている日本の民法は、その基をたどればローマ法に行き着き、ローマ人が考えていた法命題のいくつかは、現在も変わらないで生きているというようなことがわかる。たとえばローマ人のケンカとわれわれ現代人のケンカと、道具立ては違っても、それほど変わらないということですね。その普遍性が面白いと思うようになりました。大学院へ進み、ドイツへ留学の機会を与えられ、という経験のなかで、法曹の道よりも道なき道へ「新しい一歩」を踏み出す学問の道の方に気持ちがだんだん傾いていきました。

### 「二十歳の頃」のわたし

周囲の友達とはみな司法試験か国家公務員試験を受けるために、朝7時から夜10時頃まで大学にいて

勉強していましたから、私も自然に…。あまり楽しい人生じゃない(笑)。学生に言っているのは、勉強以外にやりたいことがあるなら、やった方がいい。何もないなら、国家試験とか資格とかを取って将来に備えた方がいいよと。

ただ本はたくさん読みました。自分が落ち込んだり、うまくいかなかったりした時にはモンテニユの「エッセー」。座右において時々読むといい本です。歴史のなかでも特に中国史が好きで、なかでも宮崎市定さんの「論語の新研究」などは感動して読んだものです。全集を出されていますが、どれを読んでも文章に力があって、落ち込んでいる時など励まされるような気がします。

### この学問と社会とのつながり

民法ですから、まさに私たちの日常生活すべてを規律する法律です。ありとあらゆる売買から賃借、あるいは離婚や相続など、みな民法によって規定されています。民法を学ぶ学生には初めに言っていますが、社会とのつながりと言うなら、最初から司法試験だけを考えるのではなく、たとえば宅建くらいは取ろうよと。不動産屋、建築業界、金融業界と暮らしに密着した幅広い業界で要求されるし、何かあった時にも生活できるよと。そういう意味では「パンのための学問」という面もあります。



## 民法学 益井 公司 教授

時間と場所を隔てても変わらぬ人間模様 その比較をしつつ、「なぜ」を追う。

本や歴史の話になると止まらなくなる(?)益井教授。「特に中国の歴史物が好きで、いろいろな人の翻訳で比較しながら読んでいます。どちらかというと、そちらの道へ進みたかったんですけどね(笑)」



篠原ゼミナールの仲間と日本大学軽井沢研修所にて。中央が恩師である篠原教授。中列右端で上下白服の青年が益井先生。

### 「学問」することの楽しさ、面白さ

新しい知見が得られること。自分が思ってもみなかったような発想に出会うと、なぜそんなことを思ったり言ったりするのか、調べて自分の目でみていくのが楽しい。「なぜ」を追うときには、「時的」な比較と「場的」な比較が必要です。時代が変わっても、場所が変わっても、人間がいる限り同じような問題を抱えているもので、例えば離婚問題。日本ではこれまでどう解決してきたのだろう。ドイツだったらどうだろう。フランスだったら、東南アジアだったら。なぜ彼らはそういう解決策を示すのだろう。そんな風の一つひとつ文献にあたりながら、自分で追ってみるとするのは非常に楽しいと思います。

大学院のころ先生が「わからない」「わからない」とよく言われていた。外国語の文献を全部読み、調べ尽くした上で、それでもその先生は「わからない」と。当時はそれが不思議でしかたなかったのですが、わからないことを一つ追うと、追いついた時には、そのことに関連してわからないことが数個生じている。延々と……。先生が「わからない」と言われていたのが今わかるようになりました。



#### ◎ この学問の魅力

法律学の王様

#### ◎ こんな性格が向いている!

● 歴史が好きで、論理的な思考ができる人

#### ◎ 実は、実生活でどう役立つ

● 賃借、売買、離婚、相続…すべてに

ますい・こうじ / 1978年日本大学法学部法律学科卒業。日本大学大学院 法学研究科 博士後期課程単位取得退学。日本大学理工学部講師、宮崎産業経営大学法学部専任講師、日本大学法学部専任講師・准教授を経て、2011年4月より現職。

# 尽きることなき「学び」への探究心



聞きやすく、どこか心地よい間合いの語り口。くすりと笑いを誘う話のオチ。「落語を聴くのが趣味ですから、多少影響を受けているかもしれませんが」と吉野教授。

## 政治学 吉野 篤 教授

あきらめずに忍耐強く学び続けていると  
ぱあ〜っと、地平が開ける瞬間がある。

### この学問と出会いトビラを開いたストーリー

政治学との出会いはやはりゼミナールです。日本大学法学部の西洋政治史というゼミに入りましたが、そこに現在法学部学部長の杉本 稔先生が助手でいらしゃいました。杉本先生からいろいろ教を請いながら、政治史という学問の奥深さに触れていくうちに、大学院でも少し勉強してみようかという気持ちになっていった。杉本先生との出会いが非常に大きかったと思います。現在は「キリスト教民主主義」を研究テーマにしていますが、ゼミと卒業論ではイギリスの政党史をやりました。

そのゼミのテーマを発展させようと大学院へ進みましたが、その後順調にアカデミックなポストに就けたわけではないので「喰っていくのが」大変でした(笑)。助手になったのが31歳。それまで家庭教師をしたり高校で教えたりしました。

ゼミで印象的な思い出があります。発表の分担が各自割り振られていて、ある時、ある学生がそこ

をやってこなかった。私ではありませんよ(笑)。その時、杉本先生がものすごくお怒りになった。「みんなに謝れ!」と。なんでそんなに怒るんだろう…と、その時には思いましたが、ただ「高校の宿題を忘れるのとはわけが違う。責任をもたなくてはいいんだな。厳しいものだな」と思いました。子供ながらも(笑)

### 「二十歳の頃」のわたし

アパートで一人暮らしをしていました。自炊をしていて、そんなことがけっこう楽しかったですね。高校生の時から下宿でしたけれど、自炊は初めてで面白がってやっていました。

### この学問と社会とのつながり

もちろん深いつながりがありますが、政治学を勉強したからといって、いろいろな政治的な問題にすぐ回答を導き出せるというものではありません。政治学の場合は、プロとアマの違いがあまりはっきりしないという特徴があります。つまり、その辺の

お父さんが長い人生経験のなかで、政治についてのひとつの見識をもっているということは大いにあるわけです。皆さんの周りにも政治について一言ある大人はたくさんいるでしょう? その点、法律などは素人と素人が明白に違いますね。まったく次元が違う。政治学はそうはならない。もちろん細かい部分の見解については違いますが、学問的にこういう風に考えられる、ということと、実際にどうすればいいか、ということとは非常にあいまいです。そこが政治学のもっているひとつの性質であり、「臨床性がある」という言い方をされるのでしよう。

3.11復興構想会議のリーダーにはなぜか政治学者が多いですね。復興のビジョンを描く力や、大きな枠組みをとらえる力。そういう力を買われてか、政治学者にリーダー役が回ってくるようです。

### 「学問」することの楽しさ、面白さ

どんな学問でもそうでしょうが、政治史なんていうのも、細かい勉強をやり続けるわけですね。勉強というのは基本的に苦しいものだと思いがちですが、そこをぐ〜とがまんして継続して学び続ける。そこが大事。あるところまでくると、ぱあ〜と地平が開ける瞬間がある。一定の問題についての事実関係がはっきりして、意味や意義がわかったときの喜びですね。

そこに一度立ち、喜びが感覚として残ると、次に新しいテーマに取り組むときにも継続できるようになるものです。山登りみたいですよ。がまんして上ると頂上でぱあ〜と開ける。そこが学問の楽しいところではないでしょうか。私はまだ上っている最中です。トビラもまだ開いてないんじゃないかな。

- この学問の魅力  
非常にダイナミックにして曖昧模稜なところ
- こんな性格が向いている!  
忍耐があり、すぐに成果を求めない
- 実は、実生活でこう役立つ  
役立たない。考えたこともない

よしの・あつし/1958年生まれ。1980年日本大学法学部政治経済学科卒業。日本大学大学院 法学研究科 博士後期課程単位取得退学。日本大学法学部助手、八戸大学講師、秋田経済法科大学講師・助教授・教授を経て、2008年4月より現職。



西洋政治史のゼミナールの仲間と。杉本学部長(当時助手)を囲みやや緊張の面持ちのメンバーたち。前列右が吉野先生。



### この学問と出会いトビラを開いたストーリー

新聞学科で政治ジャーナリズム、政治とメディア、政治コミュニケーション論を教えています。研究分野の中心は選挙ですが、さかのぼれば中学生くらいの時から選挙が好きでした。開票速報をテレビで見るのが好きだったと、中学校の同級生に国会議員の子が2人いて、政治や政治家が身近な存在だったこともあります。法学部の政治学科へ進み、たまたまサークルの先輩の誘いで選挙研究のゼミに入ったのが、選挙やメディアを専門にやるようになったきっかけです。

ゼミの3年の夏休み、担当教授の研究を手伝ったことは印象に残っています。ちょうど大平正芳首相が現役総理で急死した時で、亡くなる前と後とで新聞の報道が変わったのではないかと。それが自民党の大勝に大きく影響したのではないかと。新聞の内容分析ということで、僕はただ新聞の縮刷版を切り抜いて紙に500枚くらい貼付けて、記事の量を物差しで測っただけですが(笑)。それを一夏中やりました。大学院くらいからですかね、多少勉強が面白くなってきたのは。ただ世の中にもっと面白いことがある(笑)。勉強が面白くてしょうがない、という境地には今のところまだ至っていない。

### 「二十歳の頃」のわたし

身体を動かすことが好きだったので、サークルで硬式野球をやり、冬にはスキーに行ったりしていました。今でもゼミ生といっしょに毎年スキー旅行に



成田祇園祭で地元、田町の山車を背に。粋なハッピー姿で「ちょっとお酒も入ってご機嫌な」スナップ。大学3年の頃。

行きますが、教室だけが教える場ではないので、コミュニケーションをとる場にもなっています。

二十歳の頃に影響を受けた人物は、専属教授と父親ですが、ゼミの先輩だった前田壽一先生(現洗足学園大学理事長)からは公私にわたりずいぶん影響を受けました。勉強はもちろん、それ以外の教え、社会人として男としてのカッコよさ、振る舞いみたいなもの。僕も学生から憧れるような存在になりたいと思いますね。女の子には素敵と思われたいし、男の子にはカッコいいと思われたい(笑)

### この学問と社会とのつながり

政治の変化は選挙からです。選ばれる国会議員や政党が変われば政治全体が、がらりと変わる。政治が変わると世の中が変わります。例えば選挙結果についていうと、誰が当選した、誰が落選したというのは面白いですが、なぜそういう結果になったのかを理解するためには、選挙制度や選挙の仕組みがわかっていなくてはいいけない。日本国憲法の国会議員の代表制の問題などの基礎知識があれば、より正しく理解できます。

NHK「クローズアップ現代」に出演したのが最初だったと思いますが、最近では「ミヤネ屋」(読売系)「知りたがり」(フジテレビ)など、お声がかかれぱ出るようにしています。ひとつの社会貢献だと思いますし、大学の宣伝にもなる(笑)

### 「学問」することの楽しさ、面白さ

入り口は何でもいい。「動機は不純なほどいい」

テレビや新聞などメディアへの出演や発言も多い岩淵教授。「マスコミ志望の学生も多いので喜んでくれますし、テレビ出演する時には前もって知らせてくれと言われてます(笑)」

と僕は言うんですけど、例えばこの政治家がかっこいいからとか、このアナウンサーがキレイだからとか。好きになるともっと知りたいと思うようになり、知りたいなら勉強するようになる。政治に関心をもつことは、世の中に関心をもつこと。その関心には、いい関心も悪い関心もないということです。

もうひとつ、自分で限界を決めないでほしい。日本大学だから、東大、早稲田、慶應じゃないから新聞記者にはなれないと、途中であきらめてしまう学生もいますが、実際に何人も僕のゼミから新聞記者やアナウンサーになっていますからね。入学した4月の夢を、4年生までもち続けてほしい。



- この学問の魅力  
世の中が悪くなるのも、良くなるのもわかる
- こんな性格が向いている!  
好奇心旺盛、注意力散漫、落ち着かない子も
- 実は、実生活でこう役立つ  
政治家と知り合える。女子アナに会える(笑)

いわぶち・よしかつ/1982年慶應義塾大学法学部政治学科卒業。早稲田大学大学院 政治学研究科修士課程修了。慶應義塾大学大学院 法学研究科 博士後期課程単位取得退学。聖学院大学政治経済学部専任講師、日本大学法学部専任講師・助教授を経て、2002年4月より現職。



## 新聞学 岩淵 美克 教授

政治に興味をもつことは世の中に興味をもつこと  
むしろ注意力散漫なくらいがいい。

# 尽きることなき「学び」への探究心

## この学問と出会いトビラを開いたストーリー

小さい頃からテレビで国会や予算委員会の中継を観るのが好きな子供でした(笑)。父が公務員だったこともあり、そばに座って一緒にずっと観ていたのが、後になって考えればその刷り込みがあったのかもしれない。法律も政治も経済も、総合的な学びができると思い日本大学法学部の政治経済学科に入りましたが、学ぶうちに財政学に落ち着きました。法律や政治はみな財政に反映されますので、予算をみていくのは面白いなと思ったからです。

学部のゼミで指導してくださった先生が、常々「他人がやってないことをやいなさい」とおっしゃっていたことが、私の専攻領域につながっています。財政学はイギリス系の源流と、もうひとつドイツ系(官房学)の源流とがありこの2つが融合されるのですが、融合される前のところは、ほとんど研究している学者がいないので、そこをやってみたく。ドイツ官房学の先駆者と呼ばれる、ゼッケンドルフという人の官僚時代から晩年まで追っていくと、どういう風に官房学の中身を基礎づけていったのかがわかる。もちろん周辺研究をしながらですが、

もう四半世紀追っかけています(笑)。先行研究がないということはもちろん外国にはありますが、その研究をたどったり枠組みにとらわれたりしなくていいので、自分で勝手にできるところが、他人がやらない分野を研究する面白さではないでしょうか。

## 「二十歳の頃」のわたし

サークル活動の方が記憶に残っています。たまたま親戚のひとから譲られたバイオリンが縁で日本大学管弦楽団に入り、定期演奏会に向けて熱中しました。助手のころ、教授たちにチケットを配ったら「そんな時間があつたら勉強しろ」なんて言われたこともありました(笑)、それはそれ、勉強は勉強で、むしろ音楽があるから集中して勉強できるのだと自分のなかではそう思っていました。ドイツ語の文献や本ばかり読んでいたら、疲れちゃいますからね。

その後秋田経済法科大学(当時)へ赴任し、秋田で13年間過ごしましたが、その間アマチュアオーケストラに入り、やはり研究の息抜き、気分転換をしていました。現在も日本大学管弦楽団の顧問ですので、年2回の定期演奏会を楽しみにし、音楽とはずっと仲良くつきあっています。

## この学問と社会とのつながり

予算はその国の縮図です。国の予算をみれば、その国の方向性がわかるというくらいに、財政学と社会とは切っても切れない関係があります。国民が望んでいることが、そこに体现されていくべきもの、それが予算です。

## 「学問」することの楽しさ、面白さ

私は特に歴史を中心に研究していますので、過去の学者が、どういう思考経路を経て、どういう結論に至ったのかという、それを追体験できるのが非常に面白いなと思っています。どういう問題意識をもって、どういう道具を使って、どういう結論に至ったか。勉強というのは、そのプロセスを総合的に学ぶこと。入学したばかりの学生は、教員の側から課題が提示されて、いわば与えられた勉強だと思えますが、自分なりに問題意識をもって取り組むと、次に新しい場面に会ったときに応用していける。そういう意識で学べば、「いまの勉強がムダになる」といった風には感じなくなるはずですよ。

私の例で言いますと、ゼッケンドルフを研究していますが、そればかりずっと追っているとさすがに飽きてしまうし、行き詰まっちゃうんですね。少し距離を置いて周辺を研究してみる。まったく別の領域へ…というのは私の場合はありませんが、自分なりの距離感をつかんで、離れてみることも必要でしょう。いま気づきましたが、私にとってバイオリンがそれだったのかもしれないですね。

- この学問の魅力 社会の縮図
- こんな性格が向いている! 正義感が強いひと
- 実は、実生活でこう役立つ 国がどっちへ向かおうとしているのかわかる

かわまた・ひろし / 1984年日本大学法学部政治経済学科卒業。日本大学大学院 法学研究科 博士後期課程単位取得退学。日本大学法学部助手、秋田経済法科大学法学部専任講師・助教授・教授を経て、2006年4月より現職。



現在は日本大学管弦楽団の顧問として音楽にかかわる。6月の定期演奏会に向けて練習に励むメンバーと共に。



柔和な笑顔の岩井先生。学問も人生もキーワードは人間関係。「大学を通過地点にしないで、他人と知り合う場、人間関係を築き、増や場としてほしい。『耳学問』と『無用の用』をぜひ大切にしてください」



## 行政学 岩井 義和 助教

大切な人に対する時と同じコミュニケーションが行政においても必要だと思います。

## この学問と出会いトビラを開いたストーリー

行政学と政治学とコミュニケーション論のちょうど真ん中に位置するところが私の専門とする研究領域です。行政なり政治なりが、一方的に広報するだけでなく、国民とコミュニケーションをきちんととり、聞きとった意見等を行政マネジメントに反映しているのか、ということに問題意識をもち研究しています。

大学ではコミュニケーションを専攻しましたが、物心が着いた頃には人間とか社会に興味をもっていました。父が大学の教員をしていて、家にはいつも学生さんが来ていましたし、私の友人たちも自分の大学ではなく、私の父と話をしたいと言ってよく家に遊びに来ていました。父は哲学が専門でしたが、学問だけではなく、ざっくばらんに一人の大人として話をしていました。そうした環境のなかで、人間とコミュニケーションについて、突き詰めていきたいと思うようになりました。

## 「二十歳の頃」のわたし

バスケットをやっていた体育会系。毎日練習があつて、取りあえず普通の学生でした(笑)。二十歳の頃に影響を受けたのは、私の場合はやはり人との出会いです。大学近くの喫茶店に(写真右上)用もないのいつも顔をだしては、お店のママさんや近所のおじさん、おばさん、商店の人など、歳上

の大人たちの話を聞いたり、くだらない話を聞いてもらったり。それはまさに「無用の用」であつたと振り返って思います。今の学生たちと接していて気になるのが、目先の「有用」ということに捕われがちだということ。人との出会いは「無用」のなかから生まれたり、培われたりすることが多いのではないのでしょうか。学生にはよくこう言います。大人としゃべる機会をもちなさいと。流行りのように「つながり」と言いますが、人間関係の原点はフェイス・トゥ・フェイス。携帯のアンテナを気にするより、自分のアンテナを磨いた方がいいよと。

人間関係を築く上でのコミュニケーション、ということ言うならば、「相手のことを考えて言葉を発する」ということが先ず大切。相手のことを考えていれば、ちゃんと相手の言うことは聞くはずですよ。学生には「彼氏や彼女をつくる時、あなたは相手の話をよく聞くでしょ? なぜ聞くの? 聞いて好かれるためでしょ?」と。将来、公務員になる学生も多いので、コミュニケーションの原点を忘れそうになった時には、大切な人のことを思い出さないと話しています。

## この学問と社会とのつながり

日常生活のなかで行政と関わらないことはありません。もともと非効率なところを担っていたのが行政ですが、いまは効率化が求められ、それは民間



よく通っていた大学近くの喫茶店で、卒業式の日にお店のママさんのお孫さんと撮った記念の一枚。「耳学問の場でもありました」

でもできるだろうと。では行政は必要なのか、必要だとすればなぜ必要かということについて、学生も問題意識をもつことが重要です。公務員になりたいという学生には、特にそこを考えて欲しいと思います。公務員として終身雇用が約束されるわけではなく、これからますます厳しい時代がやってきます。それでもなりたいたいという人、そういう人がこれからは必要となってくるでしょう。

## 「学問」することの楽しさ、面白さ

探究心ではないでしょうか。突き詰めていくのが性格に合っているように思います。他の領域の人と話すのも面白い。日本大学には文系、理系と大勢の先生がいらっしゃいますし、同じ行政学でも細分化された他の領域の人と切磋琢磨するのは楽しいです。学生にぜひやって欲しいのが「耳学問」。ネットからいくらでも情報や知識は得られるでしょうが、「耳学問」が重要だと思います。

- この学問の魅力 身近なことを、自分たちでつくりあげていける
- こんな性格が向いている! 話が上手い。緻密で調整能力がある
- 実は、実生活でこう役立つ 申請は抜きなく、もらうものは逃さない(笑)

いらい・よしかず / 1992年成城大学文芸学部マス・コミュニケーション学科卒業。日本大学大学院 法学研究科 博士後期課程単位取得退学。日本大学法学部非常勤講師を経て、2011年4月より現職。



## 財政学 川又 祐 教授

その国の予算をみれば、国の方向性がわかる 社会の縮図といえる学問にひかれて。



もっぱら自転車に乗って近隣の大学図書館へ文献探しにでかける川又教授。「東大、明治、専修に上智や法政まで。日本大学法学部の立地は研究環境としては最高のロケーションだと思います」

## 尽きることなき「学び」への探究心



### フランス文学 畠山 達 助教

世界を規定し、自己を規定し、人の心を動かす  
それが言葉の力であり文学の力。

法学部図書館ロビーから本館前に建つ日本大学学祖、山田顕義像に向かって話しかける(?) 畠山先生。「山田先生もフランスへ行かれていたんですね? 何をご覧になり、何を感じられたのでしょうか?」



#### この学問と出会いトピラを開いたストーリー

フランス文学のなかでも19世紀の近代詩、そのなかのボードレール、それからフランス教育史を専門に研究しています。幼い頃から本を読むのも書くのも好きでしたが、フランス文学との出会いは高校1年生の時。ランボー、ボードレール、中原中也、小林秀雄という4人に会ったのが決定的でした。ランボーやボードレールを翻訳で読むうちに、これは原文で読みたいと思うようになり、中原も小林も原文で読んでいたことにも影響を受け、じゃあ大学ではフランス語を勉強しよう。

少しさかのぼりますが、ちょうどフランス文学と出会った頃、ものすごい反抗期で(笑)、とにかく日本を、古風なこの家を出て行きたいと。自分を規定している家族や日本という社会から解放されたいと思いました。僕の人生で転換期があったら、高校2年から3年にかけてのアメリカ留学。日本人が一人もいない砂漠の街で、人の温かさ、言葉の力を思い知ることになります。アイ・ラヴユー。言葉で自分の感情をここまでストレートに表現できる国があるんだと。

一方でフランス文学への熱は覚めやらず、いつしか「文学と心通ずる気でやろう、学問として文学と向き合おう」と思うように。猛勉強して東大仏文で修士、さらにソルボンヌ大学で博士をとりました。

#### 「二十歳の頃」のわたし

学部ではあまり真面目にフランス語を勉強せず、本ばかり読んでいました。原文でも翻訳でも。ただ影響を受けた面白い先生がいて、サルトルの『言葉(LES MOTS)』を読む授業で、たった1行を読むのに1時間くらいかけるんです。そこから、ものすごく深いものを読み取る。「こんなに深いものが言葉には秘められているのか! これは面白すぎる」と。この先生との出会いも大きかったと思います。

#### この学問と社会とのつながり

社会とは何か。人間の集まりです。人間の集まりで何が大事か。言葉が大事ですね。言葉は世界を規定する。自分がいま見ている世界を規定します。アカと言えば「赤」になるし、アオと言えば「青」になる。もうひとつは、言葉は自分自身を規定する。自分自身はどういうものかを考える時に言葉が必要になります。3つ目は、人との交流のなかで絶対に言葉は欠かせない。言葉で人の心が動く。人が動けば世界が変わります。

文学というのは究極的には言葉を考える学問ですから、文学と社会とは「つながり」というより、社会そのもののなかにあるものだと考えます。

#### 「学問」することの楽しさ、面白さ

ロールプレイングを例にとりましょう。ゲームのなかでキャラクターがどんなに強くなってレベルアップしたとしても、自分自身は何一つ変わりませ



フランス南部の街ペリグーでこの地方の名物、くるみのお菓子を食べているところ。勉強だけでなく、フランス文化も楽しんだ留学時代。



ん。自分がレベルアップするわけではない。ところが学問をする、例えば文学を学ぶ、語学を学ぶことによって、世界の見方が変わります。自分自身が誰だかわかるようになる。そして、人に対して使う言葉を考える力がつく。まさに自分自身が豊かになることであり、ゲームに喩えればレベルアップすること。これは楽しいし、快感です。

役に立つから勉強する、就職に有利だからフランス語検定を取る、という考え方がありますが、学問はこうした考え方に立脚するものではありません。また、3.11のフクシマの事故では「想定外」という言葉が使われましたが、そもそもこの世で何が想定できると考えることがおこましく、そういう考え方が自分自身にもしたら事故の根拠にあったのではないかと思います。学生には「常に疑問をもち続けてください」と話しています。疑問をもち続けることが、学び続けるコツではないでしょうか。

- この学問の魅力  
言葉の力に、びびっ! としびれる
- こんな性格が向いている!  
どんな性格でも向いています
- 実は、実生活でこう役立つ  
ちょっとインテリに見える、モテる(笑)

はたけやま・とむ / 1975年生まれ。東京外国語大学 外国語学部 フランス語専攻卒業。東京大学大学院 人文社会系研究科 欧米系文化研究専攻 仏語仏文学 博士課程 単位取得満期退学。ソルボンヌ大学 フランス文学科博士課程修了。2011年4月より現職。

## “日本大学が大好き!”という学生サポーター

窓口で直接接することの多い学生課や教務課のほかにも、大学には緑の下で学生や教員、大学を支える職員が大勢います。そらって“日本大学法学部が大好き!”を自認しています。困った時、悩んだ時はもちろん、ちょっと自信を無くしてしまった…というような時にこそ、声をかけてみませんか?



### 図書館事務課 齋藤 実

入職後すぐに生産工学部図書館に配属され、法学部図書館へ異動。本に囲まれて今年で19年という齋藤さん。「プライベートでは活字から離れたくて(笑)エアロピクスに夢中。机の上ではない学びを実感しています」



### 教務課 中島 佑季

入職から10年たち、窓口で直接学生と接することは少なくなったという中島さん。日本大学生物資源科学部の卒業。「とにかく日大が大好きで、卒業してからも日大と関わってたくて」大学職員の道へ。

#### 職員のソフトパワーも活用してほしい。

法学部の図書館は朝9時から夜22時まで開館しています(土曜日は21時)。法学部のランドマークでもあり、利用者は一日平均2,000人、試験期間などは4,000人の出入りがあります。在学生、教職員はもちろん、OB・OGのみなさんも利用されています。蔵書50万冊や雑誌3,000タイトルという規模が目玉ですが、図書館職員が資料や文献を探してお手伝いをする「レファレンス」

にも力を入れておりますので、ぜひ活用していただきたいと思います。一方で、机に向かって勉強するのだけが学びではないと思います。私の趣味であるエアロピクスを例にとると、最初はインストラクターの模倣がやっとなが、レベルが上がると周囲が見えるようになり、さらに先の動きを瞬時に判断できるようになる。こうした学びが逆に仕事に生きてくるのは面白いものです。

#### 「恵まれている」ことに早く気づいて!

現在は教職課程と授業のシラバス作成を担当しています。窓口で接する学生によく話すのが「自分たちがどれほど恵まれた環境にいるのか、少しでも早く気づいてほしい」ということです。大学では自分で時間割を作成するので、時間のやりくりも自由にできます。そのことに1年で気づけば充実した4年間が自分のものになるけれど、4年の最後に気づいたのではもう時間がない。大切な時間と

親御さんが払ってくれている大切なお金を、有意義に使ってほしいと思います。新入生が戸惑うことの一つに、先生が板書をしないということがあります。「教え」を「授ける」と書いて教授。知識や技術だけでなく、先生の考え方を授かるのが授業なんだと、先輩職員に聞いたことがあります。板書を写すのは簡単、話を理解するのは訓練がいりますが、それこそが大学の講義だと思います。



### 研究事務課 落合 怜美

3号館の“ケンジム”こと研究事務課をPRする落合さん。「資格取得支援の窓口エクステンションセンター」があります。入学したばかりで明確な目標がないという方はぜひ、気軽に窓口へ相談しに来てください」



### 入学センター 石田 信吾

同じく大学職員である父親の影響で、幼いころから大学祭に遊びに行くなど「大学が身近な存在だった」という石田さん。「入試相談にくる受験生やオープンキャンパスを手伝ってくれる在校生と接するのが楽しい」

#### 先生方は学びたい学生に対してウェルカム!

先生方の研究支援のための事務をしています。研究費の管理や、外部資金獲得のための申請手続きのお手伝いなど、お忙しい先生を時には講義が終わるのを待ち構えて(笑)。職員として先生に1対1で接するようになって、学んだり刺激を受けたりすることが多々あります。1つのテーマに向かって、どんなに忙しくても、若干体調不良でも「海外へ調査に行ってくる!」ということもあるので

が、最終的にはその研究成果が学生に還元されていくという思いからだと思いますし、私自身も先生をサポートすることで、学生にいい影響が及ぶといいなと思いつつやっています。法学部では専攻を超えて5学科の授業が受けられますから、接する先生も5倍。受講だけではなく、もっと深くかかわって欲しいと思います。先生も積極的に来てくれる学生はウェルカムです。

#### 法学部としては珍しい「5学科」の魅力

入試にまつわる業務と学生募集などの広報が仕事です。相談窓口で受験生から受ける相談で多いのが「法学部に決めているが、5学科のどれが自分に合うかわからない」というもの。まずは自分が今、一番学んでみたい学科を選ぶのが第一とアドバイスしていますが、逆に考えると、法学部としては珍しい5つの学科があることが日本大学法学部の魅力だと言えます。ゼミナールについては、自分の在

籍している学科以外の学科でも入れるんです。この特長を活かして視野を広げてほしいと思います。私は大学職員になって今春で5年目ですが、「勉強は大学で終わり」と思っていたが、そんなことはありませんでした(笑)。仕事のなかで自分に足りない能力に気づく。そこを強くしたいと思うと学ぶ必要がある。周囲にも働きながら資格を取られている方が多く刺激になっています。